

報告

ディスカッションを用いた哲学授業

——ショーペンハウアーの読書論を教材に

伊藤 貴雄

2009年度より本学で哲学・倫理学関係の授業を担当しはじめてから早くも8年が経過した。その間私が一番腐心したことは、授業内に学生とのディスカッションを効果的に取り入れることであった。当初の目的は、授業に対する学生の興味や意欲を高めたいというところにあったが、年数を重ねるうちに、この方法は担当する教員にも哲学・倫理学の問題に対する新たな視点や発見を与えてくれるという点で、大変有意義なものであることに気づいてきた。

思えば、前任の小林修先生は長年にわたり本誌に授業実践報告を発表してこられた。私も自身の研鑽のために、哲学・倫理学教育に関心のある方の批判を仰ぐべく、私と学生との〈共同の学び〉の記録を折々に発表したいと考えている。

以下に報告するのは、創価大学キャリアセンター主催の課外講座 Global Leader College で行なわれた読書ゼミ（2014年12月6日）の記録である。この授業は、1・2年生を中心に学部を超えて有志32名が参加し（経済学部19名、法学部8名、文学部1名、経営学部2名、教育学部2名）、土曜日に、前半10:00～11:30、後半11:40～13:00の2回に分けて行なわれた。

受講者には約1ヶ月前に教材を通知し、受講者は6つのグループに分かれて事前に彼らだけで予習会を行なった。ただし授業内で議論するテーマについては事前に通知はしていない。当日はできるかぎり多くの受講者に発言の

機会が与えられるよう心がけた。記録では個人名の代わりに、発言順に A から W の番号を付した。なお、最後に質疑応答の時間を設けた（それゆえ実際にはほぼ全員が発言したことになる）が、その内容は紙幅の都合で収録していない。

ディスカッションで意見を述べてくれた学生諸氏、そして記録の公開を許可して下さった Global Leader College スタッフの方々に、この場を借りて心より御礼申し上げる。

〈1 時間目〉

はじめに

伊 藤：今日はドイツの哲学者ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）の『読書について』を教材に、読書について皆さんと議論をしながら考えたいと思います。もっとも、ショーペンハウアー自身にこのような題名の本はありません。これは晩年の代表作である『パレルガ・ウント・パラリボメナ』（1851 年）の中から読書をテーマにしたエッセイを選んで編んだ本です。翻訳は何種類かありますが、岩波文庫（斎藤忍随訳）と光文社古典新訳文庫（鈴木芳子訳）がよく読まれているようです。いずれも立派な翻訳だと思います。

最初に著者のショーペンハウアーについて少しだけ話しておきます。彼は 1788 年にバルト海沿岸のダンツィヒ（現在のグダニスク）という街で生まれました。父親は当時のヨーロッパを代表するビジネスマンで、息子を跡継ぎにしようと思って英才教育をしました。アルトゥーア（Arthur）という名前になったのも、何語でも綴りが同じなのでビジネスに便利だという理由からでした。小さいときにフランスやイギリスでの修行を積み、母国語のドイツ語を忘れるくらい外国語を習得しました。しかし、10 代の半ば頃、彼の中で大きな疑問が湧いて

きます。そもそも世界はなぜこれほど多くの苦しみに満ちているのかという問いです。考えた末に彼はビジネスの道を捨て、当初は医学を修めようとしますが、やがて哲学へと向かっていきます。彼がどのようなプロセスを経て、どのような哲学を生み出したか。これは今日の本題ではないので、関心のある方はぜひ彼の著作を読んでください。

ところで彼の哲学はよくペシミズム（厭世主義）という言葉で説明されるので、後ろ向きの暗いイメージを持たれることが多いようです。しかし彼自身は著作でペシミズムという言葉をほとんど使っていません。それは後世の人々が彼に貼ったレッテルなのです。詳しく調べていくと、まったく異なる姿が浮かび上がってきます。私は最近『ショーペンハウアー 兵役拒否の哲学——戦争・法・国家』（晃洋書房、2014年）という本を出しましたが、そこに書いたのは次のようなことです。

今から約200年前の1813年、ドイツ（プロイセン）に徴兵制（一般兵役義務制）が導入され、成人男性は必ず一定期間軍隊に入ることが義務づけられました。当時ドイツは領土の大半をフランスに支配されていましたが、そこから支配権を回復するための戦争が起きて、「ベルリン大学の学生も戦争に行け」という話になりました。そのときショーペンハウアーは学生で徴兵年齢に当たっていました。が、彼は戦争に行かなかった。「自分は腕力によってではなく頭脳によって人類に奉仕するように生まれついているし、自分の祖国はドイツよりもっと大きい」（イエナ大学哲学部長宛書簡、1813年9月24日）という理由からです。この戦争経験が基になって彼の哲学ができたということ、また彼の主張のあちこちに同時代のそうしたナショナリズムに対する批判が含意されていることが分かってきました。

やはり、哲学というものは単に一人の人間の頭の中だけで作られた理論ではなく、その人の生々しい経験から生み出されたものだと思います。ショーペンハウアーに限らず、歴史に名を残した哲学者たちは皆、生き、悩み、苦しみながら、現実という大地を自分の足で踏みし

めて己の思想を練り上げていった。そうした精神のドラマに私は胸打たれます。

多読有害説をめぐって

伊 藤：それでは本題に入ります。まず、その名もずばり「読書について」と題するエッセイから読んでみましょう。第2節から引用します（以下、引用の文章と頁数は岩波文庫版による）。

「読書は、他人にもものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的に辿るにすぎない。習字の練習をする生徒が、先生の鉛筆書きの線をペンで辿るようなものである。だから読書の際には、もの考える苦労はほとんどない。自分で思索する仕事をやめて読書に移る時、ほっとした気持になるのも、そのためである。だが読書にいそしむかぎり、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。そのため、時にはぼんやりと時間をつぶすことがあっても、ほとんどまる一日を多読に費やす勤勉な人間は、しだいに自分でももの考える力を失って行く。つねに乗り物を使えば、ついには歩くことを忘れる。しかしこれこそ大多数の学者の実状である。彼らは多読の結果、愚者となった人間である。なぜなら、暇さえあれば、いつでもただちに本に向かうという生活を続けて行けば、精神は不具廢疾となるからである」（127-128頁）

このエッセイは驚くべきことに《読書の否定》、より厳密に言えば《多読の否定》から始まります。本を読めば読むほど人は自分で考える力を失う、と言うのです。なぜなら、読書とは「他人にももの考えてもらうこと」であるから。読書にいそしむとき、人の頭は「他人の思想の運動場」になっているのだから。本を読めば読むほど人は自分でももの考える力を失う。まるで乗り物に頼りすぎて自分で歩く力を失うようなものだ、と。

一方、大学ではどうでしょうか。皆さんはよく周りから「本を読もう」と言われませんか？ また、「自分の頭で考えよう」と言われま

せんか？ 本を読むことと、自分の頭で考えること。しかし、ショーペンハウアーに言わせれば、この二つは直接にはつながらない。それどころか、相反する場合もあるし、むしろその方が多い、と。痛烈な意見です。

皆さんはこれを読んでどう思いましたか？ ショーペンハウアーの多読有害説に対して、「その通りだ」と思う人は？ いや、「それは違う」と思う人は？ どちらの側もいるようですね。それぞれ考えを聞いてみたいと思います。ここはあえて、ショーペンハウアーの説に反対する意見から聞いて見ましょう。あなたはどのような理由で彼の主張に反対しますか？

学生 A：百パーセント反対というわけではないのです。あとに出てくる「良書を読むのは良いが悪書を読むのは駄目」(134 頁、第 6 節趣意) という主張には賛成です。しかし、最初に出てくる「読書が悪い」という強い主張に対しては、完全に賛成でも、完全に反対でもありません。

伊 藤：たしかに、このエッセイの後半でショーペンハウアーは述べていますね。人間の能力や時間には限りがあるから、悪書を読まず、良書を読むようにしよう、と。この「悪書を読まず、良書を読もう」という主張と、さきほどの「本を読めば読むほど人は自分で考える力を失う」という主張とは、彼の中でどう両立しているのでしょうか？

学生 B：その「悪書を読まず、良書を読もう」というところで、ショーペンハウアーは、良書を書いた人は「比類なく卓越した精神の持ち主」とあると述べています (134 頁)。そういった卓越した精神の持ち主と同じようにものを考えることも一つの価値ではないかと思います。自分の頭が彼らの思想の運動場になるわけですね。それが良書を読む意義であり、ショーペンハウアーは、悪書を書いた人たちの思想の運

動場になることはよくない、と言っているのだと思います。

伊 藤：つまり、エッセイの前半部分では、自分の頭が他人の思想の運動場になるのはよくないと言っているけれど、後半部分では、良い本があれば、自分の頭をその運動場にしろとも言っている。なんだか矛盾しているように聞こえますが、どう整合をつければよいのでしょうか？

学生C：ショーペンハウアーは、読書自体を否定しているのではなく、あえて最初に否定的な言い方をしているだけだと思います。このエッセイが書かれた時代、読書することが自己目的化していた傾向があったので、あえて否定したのではないのでしょうか。本当に言いたかったのは、読書は目的ではなく自分で考えるための手段なのだ、ということだと思います。

伊 藤：興味深い意見ですね。論理的に一見「矛盾」して見える主張も、時代背景を視野に入れると「矛盾ではない」と解釈できるということですね。たしかに、ショーペンハウアーも同時代の学者たちについて、「つねに乗り物を使えば、ついには歩くことを忘れる。しかしこれこそ大多数の学者の実状である」と指摘しています。他にご意見のある方は？

学生D：私も、ショーペンハウアーは本を読むこと自体を否定しているのではなく、単に情報を読み込むだけに終わるような読み方を否定しているのだと思います。後半の、良書と悪書という話は、それとはまた別の話題として述べているのではないのでしょうか。

伊 藤：エッセイの前半と後半とでは、別の話をしていると。そうかもしれませんが、では、前半と後半とをそれぞれ分けて、ショーペンハウアーの主張に本当に矛盾がないかどうか考えてみましょう。ここまでのと

ころ、皆さんからの意見が案外彼の主張に好意的でしたから、私からあえて問いかけをさせてください。

エッセイ前半で彼は、本を読めば読むほど人は自分で考える力を失う、と述べています。しかし彼が書いているのもまた本ではないでしょうか。これこそ矛盾ではないでしょうか。本は有害であると書いてある本。まるで「ポスター禁止」と書いてあるポスターのようです。「言っていること」と「やっていること」との間に生じるこうした食い違いを、学問の世界では「遂行的矛盾(performative contradiction)」と呼びます。

もっとも、人が自分の主張を真剣に表明するとき、思わずこうした矛盾を抱えることもあります。例えば、「全体主義は良くない」という主張は、全体主義という立場を排除する点において、一種の“全体主義”の表明になっています。しかし、第二次世界大戦期にナチズムに苦しめられた経験がある人ならば「全体主義は良くない」と主張するでしょう。その主張を単純に矛盾と言ってよいのか。さきほども、ある主張を理解する上で、その主張がなされた時代背景を視野に入れるのが大事だ、という意見がありましたね。

良書と悪書との区別をめぐって

伊 藤：しかし、時代背景を視野に入れてエッセイの前半を矛盾なく読んだとしても、後半はどうでしょうか？

第6節ではこう述べています。文学の世界も日常生活と同じで、いたるところ低次元のものがあふれている。「悪書の数には限りがなく、雑草のように文学の世界に生い茂っている」（132頁）。本来良書に向けられるべき金と時間と注意力が、金や地位を目的に書かれた悪書によって略奪される。そうした略奪を目論んで著者と出版社と批評家は固く手を結んでいる、と。これまた痛烈な見解ですね。

「したがって読書に際しての心がけとしては、読まずにすまず技術が非常に重要である。その技術とは、多数の読者がそのつどむさぼり読むものに、我遅れじとばかり、手を出さないことである。たとえば、読書界に大騒動を起こし、出版された途端に増版を増版を重ねるような政治的パンフレット、宗教宣伝用のパンフレット、小説、詩などに手を出さないことである。このような出版物の寿命は一年である。むしろ我々は、愚者のために書く執筆者が、つねに多数の読者に迎えられるという事実を思い、つねに読書のために一定の短い時間をとって、その間は、比類なく卓越した精神の持ち主、すなわちあらゆる時代、あらゆる民族の生んだ天才の作品だけを熟読すべきである。彼らの作品の特徴を、とやかく論ずる必要はない。良書とだけ言えば、だれにでも通ずる作品である。このような作品だけが、真に我々を育て、我々を啓発する。

悪書を読まなすぎるということもなく、良書を読みすぎるということもない。悪書は精神の毒薬であり、精神に破滅をもたらす。

良書を読むための条件は、悪書を読まぬことである。人生は短く、時間と力には限りがあるからである」(133-134頁)

さきほども何人かの方が言及していた「悪書を読まず、良書を読む」という主張です。でも、考えてみてください。皆さん自身は、良書と悪書とをどうやって区別しますか？

ショーペンハウアーは、現代の新刊書やベストセラーの大多数は悪書なので、「あらゆる時代、あらゆる民族の生んだ天才の作品」を読むように勧めています。要するに「古典を読め」ということです。第7節ではシュレーゲルのこんな言葉を引いています。「努めて古人を読むべし。真に古人の名に値する古人を読むべし。今人の古人を語る言葉、さらに意味なし」。しかし、ここでまた一種の遂行的矛盾が生じています。というのも、ショーペンハウアーのこのエッセイ自体、発表された時点では新刊書（『パレルガ・ウント・パラリポメナ』1851年）の一部でしたし、しかもこの本はほどなくベストセラーになったからです。

その後、今日に至るまで、世界はますます出版物で溢れ続けているわけですが、ショーペンハウアーの多読有害説はその希少性ゆえにか

えって世の注目を集め、時のふるいに残ることになりました。しかしそれはあくまで結果論です。彼自身は出版当時、自分の本が後世に残ることをどうして予測できたでしょうか？ 新刊書より古典を読み、と言っている彼自身の本が当時は新刊書だったわけです。これもまた一種の矛盾ではないでしょうか。

そこで、皆さんに再度お聞きします。皆さんは良書と悪書とをどのように区別しますか？ あるいは、そうした区別はそもそも可能なのでしょうか？ まず、グループで少し話し合ってみてください。そのあとグループごとに誰か、意見をまとめて言ってください。

（5分のグループ・ディスカッション）

では、ここのグループから意見を聞いてみましょう。

一般的な区別はできない（第1グループの見解）

学生 E：私たちのグループでは、良書と悪書を分けることはできないのではないかという話になりました。読者一人一人でバックグラウンドや立場も違うので、意見も違います。したがって、同じ本でも、ある人は良書だと思うかもしれませんが、また他の人は悪書だと思うかもしれないため、一般的にこれは悪書だ、あるいは良書だとは言えないと思いました。

伊 藤：面白いですね。では、ここで全員に聞いてみましょう。良書と悪書とは区別できないという思う人は？ けっこういますね。

ショーペンハウアーは、読書によって自分の頭が他人の思想の運動場になるのは良くないと言っています。いま私たちが彼の本を読み、彼の主張通りに「古典が良書で、新刊書は悪書だ」と考えるなら、私たちの頭はショーペンハウアーの思想の運動場になってしまいますよね。反対に、良書と悪書とは区別できないと考える人がいれば、その

人の頭は、彼の思想の運動場にはなっていないことになるでしょう。

とすると、「良書と悪書とは区別できない」と考えるほうが、むしろショーペンハウアーの理想とする読書かもしれません。逆説的ですが、哲学者の主張は、しばしば私たちをこうしたパラドキシカルな思索へ誘います。彼の主張を疑うことなく「その通りだ」と受け取ると、かえって彼の精神に反していたり、彼の主張に対して「そうではない」と批判することのほうがむしろ彼の精神にかなっていたりするのです。

例えば、ソクラテス、プラトン、アリストテレスしかり、哲学の師弟関係というのは、けっしてある固定した思想の伝達史ではないのです。異なる意見の持ち主たちが真剣にそれぞれの個性をぶつけ合うなかで、哲学の伝統が築かれたのです。ショーペンハウアーの読者にも大きく二通りいると思います。「すべて彼の言う通りだ」という読者と、「いや、彼の意見にも間違いがあるのではないか」という読者です。ときに両方を兼ねる読者もいます。良い例はニーチェでしょう。彼はショーペンハウアーの一番弟子ですが、一番反抗した人でもあります。

コメントが長くなりました。他のグループの意見も聞いてみましょう。良書と悪書とをどう分けるか？ このグループはどうですか？

読者の態度で決まる（第2グループの見解）

学生F：私の意見ですが、さきほど出た「読書を目的とするのではなく手段とする」という意見（学生C）にととても納得しました。読書が考えるための手段なのであれば、私は本を良書／悪書に分けることはできないのではないかと思います。まず読んでみなければ、その本が良書なのか悪書なのかは分からないですよ？

伊 藤：たしかに。

学生 F：読むときにしっかりと考えなければ、頭がその本の思想の運動場になってしまいますし、悪書にもなりうると思うのですが、その本が良書なのか悪書なのか決まっていない状態で、一冊の本としてしっかりと考えながら読むのであれば、良書にもなりうるのではないのでしょうか。

伊 藤：あなたの意見は、本自体には良書も悪書もない、もし良書と悪書とを分ける基準があるとすれば、それは本の側ではなく読者の側にある。読む側が本の内容を鵜呑みにしていると、その本は悪書になってしまうし、脳をフル回転させて読んでいれば良書にもなりえる、ということでしょうか？

学生 F：はい。そうです。

伊 藤：さきほどあなたは前の学生の意見に賛成していたけれど、いまあなたの頭は彼の思想の運動場になっているかもしれないね。（笑い）

学生 F：そうかもしれませんが、私自身『リアル鬼ごっこ』（山田悠介著。国家が特定の国民を理不尽に粛正する小説）という本を悪書だと思いながら読んでいました。それでも頭の中では死刑について考えたりもしました。物語のラストで、狙われた側が黒幕を殺すのですが、この行動が復讐として正しいのかなど色々と考えさせられました。結局、悪書と思いながら読んでいたのですが考えることが多く、自分で考えるきっかけになったという点ではこの小説は悪書と言いきれないと考えが変わりました。このような経験があったので、さきほどの意見（学生 C）にも共感できました。

伊 藤：あなたが考えた帰結が、偶然にも前の学生の意見と同じだったのですね。ショーペンハウアーも、別のエッセイでこう述べていますね。

自分で考え抜いて探り出した洞察が、すでに古人の本に書かれていたとしても、落ち込む必要はない。自分で考えたこと自体に価値がある。なぜなら、「自分で考えた結果獲得した真理は生きた手足のようなもので、それだけが真に我々のものなのである」(「思索」第4節、9頁)から、と。

さて、あなたの結論は、同じ本でも「自分で考えれば良書、考えなければ悪書」というものでしたが、要するに、どんな本でも、読んでそこに自分の思想を少しでも付け加えることができれば「良書」になる。「良書を読む秘訣は悪書を読まぬことだ」とショーペンハウアーは言うけれど、まずは読んでみなければ良書／悪書の区別はできない、という反論ですね。すごく面白い意見です。ちなみに、ショーペンハウアーのこの本はあなたにとって良書でしたか、悪書でしたか？

学生 F：私にとっては良書でした。

伊 藤：それは彼に代わってお礼を言わなければ(笑い)。

区別すること自体に問題がある(第3グループの見解)

伊 藤：では、次にここのグループではどんな意見が出ましたか？

学生 G：私は良書と悪書を分けることが正しいことなのかと考えました。つまり、良書と悪書を分けること自体が、ショーペンハウアーの思想の運動場における考えではないかと思うのです。これを考える上で、私は哲学の起源についても考えました。どんな偉人の思想であっても、その前にいた人の考えに影響を受けているわけなので、仮に哲学という営みを始めた人がいたとすれば、結局のところいま自分たちが考えていることのすべては、その人の思想の運動場で動いているのだと

思います。良書と悪書を分けるという思想も、分けないという思想も、その一人の思想の運動場での考えなのではないかと思うんですね。うーん…

伊 藤：深いね。その最後の「うーん…」という言葉が深い。たしかに、ショーペンハウアーの「本を読めば読むほど人は自分で考える力を失う」という思想も、じつは彼の独創ではないかもしれません。同じ趣旨のことは、彼が尊敬していたカントという哲学者も述べていますし（「啓蒙とは何か」）、そのカントが尊敬していた先人たちも書いていますから（デカルト『方法序説』など）。そうすると、あなたの言う通り、結局のところすべては思想のバトンタッチの繰り返しではないかとも言える。

これは私たちも同じですね。さきほど二つのグループから意見を聞きました。いずれもショーペンハウアーの説に反論していました。自分たちの頭をショーペンハウアーの思想の運動場にするのではなく、自分たちの意見を出していました。すばらしいことです。しかし、その意見は、本当に皆さんの中から生まれてきたもののでしょうか？ それとも、皆さんが小さい時から接してきた家族や友人、学校の先生、あるいは本やメディアから影響を受けて形成され蓄積された思想群の中から出てきた、という可能性はないでしょうか？ ショーペンハウアーの説に賛成しようと反対しようと、結局のところ人は自分の頭で考えているのではなく、つねにすでに他人の思想の運動場で考えているのかもしれませんが。だからといって、それが悪いことだというわけではない。やはり一度は他人の思想の運動場に立ってみないと、自分で考える練習もできないわけですから。

あなたのさきほどの「うーん…」という言葉が表現していたのは、人間の思想のそういう奥深さではないでしょうか。

でも、もしかするとこういう考え方もできるかもしれません。人は、

「自分の頭はじつは他人の思想の運動場かもしれない」と思う、その瞬間だけは自分で考えている、と。「私の考えは誰かの思想の借り物ではないか」と自省する、その瞬間だけは自分で考えている、と。もっとも、いまの私の発言を聞いて「ああ、そうなんだ」と鶴呑みにした時点で、自分で考えていないことになります（笑い）。「本当にそうなのか？」と疑う瞬間。あるいは、「本当にそうなのか？というこの疑いそのものも自分が発したものなのか？」と疑う瞬間。そうした瞬間だけ人は自分で考えているのかもしれない。

哲学というのは、A という意見を B に裏返したり、それをまた C という意見でひっくり返したりして、オセロゲームのようにつねに反転し続けている世界です。ああでもない、こうでもない、異なる答えの可能性を追求しては、そのたびに「まだ分からない」と痛感させられる世界です。

では、次にこのグループはどう考えますか？

作者の意図で決まる（第4グループの見解）

学生 H：はじめにチームの中で良書と悪書に分けて、それぞれのイメージを考えていたのですが、私はすべての書籍は「意図」によって悪書も良書になり得るのではと思いました。

伊 藤：意図というのは「作者の意図」ですか？

学生 H：はい。作者の意図です。もし、本の内容が悪くても、作者の意図が善い方向に向かっているならば良書とも言えるのではないかと考えました。

伊 藤：面白いですね。さきほどは読み手の態度によって良書と悪書とは区別されるという意見でしたが、今度は書き手の意図によって区別され

るという意見です。例えば、こういうことでしょうか。太宰治の『人間失格』というすごいタイトルの本があります。でも、この本は決して人間失格をアピールしているのではなくて、墮落も自己嫌悪も含めた自分の赤裸々な姿を語ることで「人間とは何か」という命題への一つの回答を提示している本と言えるのではないかと。でも、ここであえて聞いてみたいと思います。あなたがもし将来結婚して子どもが生まれ、その子に何か本を読ませたいと思う日が来たとしましょう。そのときに、一見悪書に見える本と、一見良書に見える本とでは、どちらを読ませますか？

学生 H：良いと思う本を読ませます。

伊 藤：でも、悪いと思える本でも作者の深い意図が込められているかもしれないわけですよね？ むしろわが子を「考える子ども」に育てたいと思うならば、一見悪そうに見える本を与えても、その子が自力で這い上がってくるという可能性を、親として信じたいとは思いませんか？

学生 H：そうですね。

伊 藤：仮に、本の選択肢が二つしかないとしましょう。片方はさきほど話題に出た『リアル鬼ごっこ』、もう片方はシェイクスピアの『ハムレット』。あなたは小学校6年生の子どもにどちらを読ませますか？

学生 H：子どもが自分で考える力があると感じたら、『リアル鬼ごっこ』を読ませてもいいのかなと思います。

伊 藤：賢い小学校6年生の子どもならばいいわけですね。では、その子どももし小学校3年生だったらどうしますか？

学生H：読ませては駄目です。

伊 藤：なぜ駄目ですか？

学生H：まだ考える力がないと思うからです。

伊 藤：では、皆さんに聞いてみましょう。小学校3年生の子どもに、『リアル鬼ごっこ』とシェイクスピアの『ハムレット』との、どちらかしか与えることができないとすれば、どちらを与えますか？『リアル鬼ごっこ』を読ませる人は？ 何人かいますね。なぜですか？

親が決めるか、子が決めるか？（上記の議論を受けて）

学生I：僕は小学校3年生のときに『ズッコケ三人組』（那須正幹原作の児童文学）を読んでいました。自分で考える力をもつためには様々なジャンルの本を読む必要があります。自分が『ハムレット』を良いと思っていても、子どもが同じようにインスピレーションを受けるかといったらそうではないと思います。子どもに色々な本を読ませたほうがためになると思います。

伊 藤：たしかにシェイクスピアの『ハムレット』は戯曲なので、それを読ませたら逆に読書嫌いになって二度と本を読まなくなる可能性もあるかもしれません。それよりもむしろ読書の楽しみを教えた方がいいのではないかということですね。では、反論として、やはり『ハムレット』を読ませた方が良いと思う人はいますか？

学生J：『ハムレット』です。子どもの時期の読書は、その後の読書の土台となるので、古典のほうがよいと思います。

伊 藤：他の方で、再反論はありますか？

学生 K：僕は小さいころから恐竜が好きで図鑑を見ていました。そこから考古学が好きになっていき、本を読むようになりました。例えば、親から巖窟王（デュマ著『モンテ・クリスト伯』のこと）やアリストテレスを読ませられていたら、読書好きにはなってはいないと思います。

伊 藤：他の方で、何か意見はありますか？

学生 L：親がこの本を読みなさいと与えるよりも、子どもの興味のほうが大事であると思います。本を読ませても子どもの興味が湧き立たなければ意味がないので、子どもにとって興味がある本を読ませることが、子どもの将来につながると思います。

伊 藤：どちらの本を読ませるかは、子どもに選ばせるべきであるという意見ですね。では、ここで聞きます。あなたが「良書」と思う本、「悪書」と思う本を、一冊ずつ思い浮かべてください。思い浮かべましたか？では、その二冊がいま、あなたの子どもの目の前にあるとしましょう。あなたは親として、子どもにどちらを選んでほしいですか？

学生 L：そう思うと、悪書は何か分からないです。

伊 藤：では、こうしましょうか。例えば、週刊誌と、ジュニア向け新書とでは、どちらを選んでほしいですか。

学生 L：新書です。

伊 藤：あれ、子どもが選ぶのではなかったの？

学生 L : それは私が読んでほしいと思っているものです。

伊 藤 : でも、親としてのそういう思いが、暗黙のうちに子どもを誘導するような態度に現れる可能性はないでしょうか？ 例えば、「こっちを読んでくれたらディズニーランドに連れてってあげるよ」とか(笑い)。さて、このグループは良書と悪書とをどうやって区別しますか？

著者の目的観と思索量で決まる (第5グループの見解)

学生 M : ショーペンハウアーの影響を受けた意見かもしれませんが、自分の利益や名誉のために一時的な流行に乗って書かれた本は「悪書」で、純粹に思索するために書かれた一世紀に十数冊しか出ないような本は「良書」。目的観が違うので行動が違ってくる。行動が違うから思索の量が違う。目的観と思索量が、良書と悪書を区別すると思います。

伊 藤 : たしかに、ショーペンハウアーも当時の流行作家を名指しで批判していますね。そこで挙げられている作家たちの本で、今日まで読まれているものはほとんどありません。一方、彼が一流の作家や哲学者として挙げている人々の本は現在でも読まれています。彼の予言は当たったわけです。もっとも、作家たちの目的観を見きわめるのは困難かもしれません。それは、人が他人の内面を知りうるという前提があつてのことですから。しかし、いずれにしても、時のふるいにかげられて、著者が作品に充填した「思索量」の多いものが残った、ということと言えるかもしれません。

ショーペンハウアー自身の著作もそうですね。彼は 30 歳で最初の代表作である『意志と表象としての世界』(1819 年)を書きました。しかし当初はほとんど注目されず、売れなかった。そのあと何冊か書きますが、それも売れない。彼に光が当たったのは 60 歳を過ぎ

てからです。私たちが読んでいるこの「読書について」が入っているエッセイ集『パレルガ・ウント・パラリポメナ』によってです。それも、出してくれる出版社が見つからないので自費出版でした。これがベストセラーになったんですね。彼自身、著作が売れずに苦しんだ人でしたから、金銭のために書かれた本か、思索のために書かれた本か、そこを区別してほしいという思いが人一倍強かったのかもしれませんが。しかし、それゆえにまた流行というものの頼りなさを知っていた人でもあったのでしょう。

さて、最後のグループの意見を聞きましょう。良書と悪書とをどうやって区別しますか？

殿堂入りの悪書もある（第6グループの見解）

学生N：話し合った結果、良書と悪書は分けることができるという意見になりました。私たちは本を四段階に分け、「最良書」、「良書」、「悪書」、そして悪書の中でも「殿堂入りの悪書」というものを考えました。最良書の定義は100年以上残った古典書です。なぜかと言えば、100年残るということはそれだけ多くの人に思索を与えたということであり、それを読むことで私たちは考えさせられることが多いからです。

「良書」と「悪書」の区別は、読んで思索が生じてくるかどうかであると思います。自分の経験や考えを踏まえて思索するかどうかで、その本は良書にも悪書にもなり、ここは人それぞれ違うという意見になりました。

そして「殿堂入りの悪書」は、書かれている内容は悪いけれども、100年残っている本です。悪書であるのに残っているということは、何かしら私たちに考えさせている本なのではないか。悪書だからこそ、これが悪書だと私たちに考えさせてくれるのだと思います。

伊 藤：あなたの意見をまとめると、100年以上残る殿堂入りの良書というものがある。読み手を考えさせるかどうか、あるいは読み手が考えるかどうかによって、良書と悪書とが区別される。そして、殿堂入りの悪書は、長年にわたり教訓として読み継がれる可能性があるものだ、と。その「殿堂入りの悪書」とは具体的にどのようなものですか？

学生 N：私たちのグループでは、ヒトラーの『わが闘争』が、それに当てはまる可能性のある本の例として出ました。

伊 藤：その意見は皆さんにも考えてほしいですね。ヒトラーの『わが闘争』を読んだことのある人はいますか？ あなたの読んだ感想は？

学生 O：僕は、人種差別という部分で引っかかりました。ただ、彼が聴衆をどう引き寄せるかという術に長けているとも思いました。そこをどう考えるとよいのか、完全否定ということではよいのか、分かりません。

伊 藤：ちなみにドイツでは禁書です。法律で決まっています（注：同書は第二次世界大戦後、著作権法によって、2015年12月までドイツ国内における複写・印刷が禁止されていた。本授業が行なわれたのは2014年12月）。ここで皆さんに聞きます。法律で禁書にすることは、「言論の自由」と相容れないようにも思えます。禁書を定めることについて皆さんはどう思いますか？ ヒトラーによって史上最大の悪行とされるホロコーストが起きたドイツという国では、それはやむをえないことなのか。あるいは言論の自由という理念に照らして問題があることなのか？

ここで休憩を入れます。あとで皆さんの意見を聞きたいと思います。

〈2時間目〉

禁書にするメリット

伊 藤：さきほど「殿堂入りの悪書」という話が出ました。この話を引き続き考えてみましょう。ヒトラーの『わが闘争』は、ドイツでは法律で禁じられています。さて、国家が禁書を定めることは「言論の自由」に反するものなののでしょうか？ むしろ人間に考えさせるためには、そういう悪書に触れる機会も封じないほうがよいのでしょうか？ またグループで話し合ってみてください。

（5分のグループ・ディスカッション）

これは難しくて答えるににくい問題かもしれません。まず、ヒトラーの『わが闘争』は禁書にすべきだ、という意見から聞いてみましょうか。

学生 L：たしかに、ヒトラーの悪の思想を知って、読者に考えさせるというのもあると思いますが、ヒトラーの書いた本だと、ヒトラーの影響力が強いので、その思想に染まってしまう人が出る危険性があります。ヒトラーの思想を知って考えを深めることが目的ならば、日本人が戦時中の軍国主義について教科書で学ぶのと同じように、教科書などで学ぶべきです。ヒトラーの主観の入った本を読んではしまったら、危険な行動を起こす人も出てくる可能性があるのではないかと、思います。

伊 藤：他にもどうでしょうか。あなたはどのような意見ですか。

学生 P：まず私の根本的な考えとして、自由が一番大切にされるべきものであるということを最初に言っておきます。その上で私は、『わが闘争』は禁書にすべきだし、禁書にしてよかったと思っています。なぜかという、ドイツにとって、ヒトラーの本を禁書にすることは、国際的

な態度表明になるのではないかと思うからです。第二次世界大戦後、国連安保理の常任理事国にはドイツや日本は入れない状況にあります。ドイツがこの状況を生み出した源泉とも言えるヒトラーの本を禁書にすることは、国際社会に対して「ドイツはもう他国を侵略しません」という意思表示になると思います。

もちろん私の主張には弱点もあります。戦後70年が経過した現在のドイツ国民は、ヒトラーの本を読んでも洗脳されずに、悪い内容だと認識して読めるかも知れないし、逆に読んで思索することで、確実に神格化を避けられるかもしれない。禁書ではなくなることでそういうメリットがあるのかも知れない、とも思います。しかし、人間の本性が戦争当時と現代とで変わったのかということを見ると、私自身は疑問です。当時はヒトラーというカリスマ性のある指導者が登場し、経済の復興や雇用の拡大もあって、彼の煽動に国民が引き付けられていきました。今後、ヒトラーのような人間は現われなくても、煽動されるような人間の本性、民族主義というものは少しも変わらないと思います。ですので、他の思想に関しては、まったく統制すべきではないと思うのですが、ヒトラーの本を禁書にするのは、国家の責任として正しい選択だろうと思います。

伊 藤：今の二人の意見を私なりにまとめてみます。

最初のLさんは、ヒトラーの『わが闘争』について、「これはゲルマン民族至上主義で、ユダヤ人の抹殺を唱えた書物であり、この本によってナチスによる大量虐殺の悲劇がもたらされたのだ」と、教科書で教えるのはよいけれども、誰もが手にとれる場所に置くべきではない。こういうふうにまとめてよろしいでしょうか？（学生L：うなずく）

次のPさんは、ヒトラーの本を禁書にすることが、ドイツの政治的な態度表明として重要である。ヨーロッパにおいてドイツへの不信感を拭うためにもよいし、ドイツにおいて民族主義を復活させないた

めにもよい。こういうふうにまとめてよろしいですか？（学生P：うなづく）

では、Lさんに少しお聞きしたいのですが、さきほど（一時間目）良書と悪書どうやって区別するのか議論したときに、あなたは、それは子ども自身が考えるべきだ、と答えませんでしたか？

学生L：はい。

伊 藤：だとすると、あなた自身は、良書か悪書かを決めるのは読み手の側だと考えていると思うんです。しかし考えてみてください。教科書に「ヒトラーの『わが闘争』は悪書だ」と記述してしまったら、子どもの考える自由を損なうようになりませんか？ どうですか？

学生L：たしかにそうですが、ヒトラーの本はあまりに危険すぎるので、国家がそう見なすべきだと感じました。

伊 藤：あなたの意見は、良書と悪書との区別は基本的には読み手の自由にまかせてよいが、人間の判断力は完全ではないから中にはヒトラーに感化される人も出るかもしれない。したがって、「殿堂入りの悪書」に関しては国がコントロールしたほうがよい、ということでしょうか。つまり、さきほどの読み手が決めるという意見に、若干の修正を加えたわけですね。

以上の二人の意見をまとめるとこうなるでしょう。ショーペンハウアーの言うように、みんなが自分の頭で考えられる哲学者ならいいけれども、多くの人は自分の頭を他人の思想の運動場にしてしまう傾向性がある。だから究極の悪書については国がコントロールしたほうがよいし、また、国が戦争犯罪者の本を禁書にする姿勢を示すことは、その国が国際社会で信用されるために必要な政治的判断でもある、と。

これらの意見に対して、自分はこう思うという人がいればどうぞ。これは難しい問題で、決まった正解があるわけではないから、思ったことを自由に述べてもらって構いません。

禁書にするデメリット

学生 Q: まずこの問いに対する自分の解釈を話します。この問いは、ヒトラーという個別の事例よりも、悪書を禁書にすべきかどうか、という一般的な問題と捉えました。その上で一番キーワードになるのは、社会と時代であると考えます。国民がこの本は良書か悪書かを思考できない状態なのであれば禁書にするという考え方があると思います。逆に言えば、国民がそれを思考できる状態なのであれば、禁書にする必要はないと思います。

この問題をヒトラーの話に落とし込んだ時に混乱したのは、このヒトラーの本は、読者がそうした問題を思考できる本なのか、思考できない本なのかということに関わってくるからです。さきほど述べられていたように、この本の持つ影響力の大きさ、人間から思考を奪って洗脳する力を危惧するならば、禁書にすべきということになるのかも知れません。

ただ、私はヒトラーの本は読んだことがないので、そのどちらなのか分かりません。もし仮に、読者が内容の是非を思考できるものだとしたら、禁書にしないほうがよいでしょう。もし禁書にしてしまうと、もしかしたら時間が経つにつれて、国民が自分で判断できなくなり、かえってより悪い方向に行ってしまうのではないかと考えたりもしました。

伊 藤：非常に重い問題です。禁書にすることで、中には禁書こそ読んでみたい、タブーにこそ触れてみたい、という人も出てくるかもしれない。

現在ドイツでは、ネオナチという民族主義者・排外主義者が一定数いて、現在も増えつつあります。どんなに法律で禁じようと、人間は禁じられたものの中にこそ真実があるのではないかと思う人も出てくる。つまり、まさに殿堂入りさせることで、ヒトラーをもっと知りたいとか、ドイツ民族の本来の思想が禁じられているのではないかと思う人も出てくる。これは対岸の火事ではない。日本でも今ヘイトスピーチの問題があるわけですから。

どこまでが言論の自由で、どこからが法規制の範囲かというのは、じつに難しい問題です。文学においてもそうです。例えばシェイクスピアの『ハムレット』は、最終的にハムレットが自分の叔父を刺殺して終わります。もしかしたら、ハムレットを読んで殺人に興味をもつ人もいるかもしれない。もしヒトラーの『わが闘争』を禁じるのであれば、『ハムレット』も禁じるべきではないのか。何の違いがあるのか。なぜ私たちは前者を禁じて、後者を禁じないのでしょうか？ 出版された時点で、ある本がその読者を殺人の思想に仕向けるのかどうかは予測不能です。また今後も『ハムレット』を読んで親族を刺し殺すことに使命感を感じる人が出るかもしれない可能性を完全には否定できません。『ハムレット』ではそういうことはありえないというのであれば、ミステリーや、ホラー小説はどうでしょうか。それらに影響を受けた殺人事件が、未来永劫起きないと断言できるでしょうか。

今まで3人の方に意見を聞きましたが、他にもどうでしょうか？

ふたたび「作者の意図」をめぐる

学生 R：私は本のレベルによって、著者の「意図」によって決められるなど感じています。私もヒトラーの『わが闘争』は読んだことがないので分からないのですが、この本は少なからずユダヤ人を殺害する意図があったのではないかと考えています。しかし、『ハムレット』の中で

殺人のシーンがあったとしても、そういう意図はなかったのだから禁書にする必要はないのではないかという風に考えました。

伊 藤：たしかに『ハムレット』ならばそういう風に言えるのかも知れないけれど、グレーゾーンの作品はないでしょうか？ 最近、『悪の経典』（貴志裕介原作、三池崇史監督）という映画が話題になっていましたが、あなたは見たことがありますか？ そのときはどう思いましたか？

学生 R：倫理を説いているようには感じませんでした。

伊 藤：原作は禁書リストに入れるべきですか？

学生 R：それは分らないですね。

伊 藤：あなたの意見では、作者の意図によって良書と悪書とが分けられるのですよね？ 『悪の教典』の意図は、あなたによると倫理を説いているようには感じない作品のようですが、その点についてどう考えますか？

学生 R：少なくとも殺人肯定の意図はないと思います。

伊 藤：あなたはどのようにして作者の意図を判断しますか？ 例えば、シェイクスピアの日記が突然発見されて、「親族殺しを肯定するために私は『ハムレット』を書いた」という記述が見つからないとも限りません。作者の意図といっても、あなたは他人の気持ちをそこまで理解できますか。

学生 R：他人の意図は分かりません。

伊 藤：では、ヒトラーが『わが闘争』を書いた意図も分からないことになりませんか？

学生 R：うーん…。

伊 藤：悩ませてごめんね。もちろん、次のように考えることは可能です。『わが闘争』は現実にユダヤ人虐殺を引き起こしたが、『ハムレット』はそうした悲劇をもたらさなかった、と。ところがこれも単純には言い切れません。『ハムレット』ではないですが、同じシェイクスピアの『ヴェニスの商人』にはシャイロックというユダヤ人の高利貸しが登場します。そのため、この作品にはユダヤ人への偏見が入っているし、シェイクスピアの名声が広がるとともにヨーロッパにおけるユダヤ人への偏見も助長されたという見方もあります。この見方によるなら、シェイクスピアの作品もその後の歴史におけるユダヤ人迫害に間接的に関わっていると言えるかもしれません。

なお、シェイクスピアの名誉のために一言付け加えておくと、ドイツの作家でユダヤ人のハイネは違った解釈をしていて、シェイクスピアは『ヴェニスの商人』でむしろユダヤ人差別を批判したのだ、と擁護しています。作者の意図というのはブラックボックスのようなもので、一概にこうだと判断できないのが難しいところです。また、いかなる作品も、いったん世に出た以上は、作者の意図を超えてどのようになっても解釈できるので、作者自身には民族差別の意識がなかったとしても、結果として作品がそうした差別を助長してしまう可能性も否定できません。難しい問題ですね。

他に、禁書に関して意見のある人はいますか？

思想の善／悪は決められるのか

学生 S：少し論点がずれるかもしれませんが、今までの話で「殺人」がキーワードになっていたと思うので、自身の考えを述べます。殺人が悪いことだという前提で話をされていたと思うのですが、私はもともと、思想において良い思想と悪い思想があるとは考えていません。今は殺人が悪いという共通認識があり、日本においては殺人行為が法律で禁止されています。しかしそれは「生命の尊厳」を第一にすべきだという思想が、時間をかけて日本に広がったからです。その思想が多数を占めるまでのプロセスにおいては、そうではない思想も市民権を得ていたと思います。したがって、最初から殺人は悪だという前提で、殺人が描かれた作品を禁書にすべきかどうか話し合うことには疑問があります。

伊 藤：たしかに今私たちは「殺人は悪である」という前提の上で議論をしています。そして、すべての殺人が悪なのかというと、たしかにそれも難しい問題です。例えば、死刑制度についてはどのように考えたら良いのでしょうか？ また、民族紛争が泥沼化しているところに第三国が武力的に介入することは間違っているのでしょうか？ さらには正当防衛の場合など、やむを得ざる殺人というのはないのでしょうか。このように考えていくと、私たちは本来最初に「殺人は悪なのか」について、また、「殺人の定義とは何か」についても考えなければならなかったのかもしれない。

私たちは、「良い」「悪い」という言葉を使うときに、すでに一定の価値観を前提にしてしまっていることがあります。それは果たして「良い」ことでしょうか？ ましてそれを法律で定めることは「良い」のでしょうか？ しかし、何らかの価値観を前提にしなければ、人間が社会を作って生きていくことはできません。どこかで法や規則によって最小限の線を引かなければなりません。ヒトラーの『わが闘争』の

出版が解禁されたとき何が起きるのでしょうか？ この戦後70年間禁書だったのですから、ある意味ではこの本に対する興味を持っている人がいるかもしれません。現にネオナチが広がっています。今ここで解禁にすると飛びつく人が増えるかもしれません。そうなるくらいなら、禁書のままにしていた方が良いかもしれません。

また、ドイツが『わが闘争』の出版を解禁することはドイツの国際的信頼に関わるかもしれません。しかし、ここでもう一つ考えなければならぬことがあります。そうした政治的な判断でこの本を禁書にする／しないという話は、あくまで政治の問題であり、良書／悪書という話とは別なのではないかということです。政治の価値判断と、思想の価値判断とは、次元を異にします。つまりこういうことです。国際的信頼を得る目的で『わが闘争』を禁書にすることと、ホロコーストの犠牲者に哀悼の意を表することとは、別の次元の話であるということです。『わが闘争』の禁書にすることかどうかという問題を、国際的信頼を気にして決定することは、ホロコーストの犠牲者を政治利用することになりかねません。

良書と悪書とをどう区別するかという問題をめぐって、ここまでさまざまな意見が出てきましたが、これはどこまで行っても難しい問題です。考えれば考えるほど、「分からない」という思いにさせられます。

思索と言葉とのあいだ

伊 藤：ここでふたたびショーペンハウアーのテキストに戻ります。『読書について』から、「思索」と題するエッセイの第3節を引用します。

「もともとただ自分のいづく基本的思想にのみ真理と生命が宿る。我々が真の意味で十分に理解するのも自分の思想だけだからである。書物から読みとった他人の思想は、他人の食べ残し、他人の脱ぎ捨てた古着にすぎない。

我々自身の精神の中にもえいでる思想はいわば花盛りの春の花であり、それ

に比べれば他人の本から読みとった思想は石にその痕をとどめる太古の花のようなものである」(8頁)

つまり、自分で考えることと、読書することとの関係は、ちょうど野に咲く花と、押し花あるいは化石の花との関係のようなものである、と述べています。これと似たことを、ショーペンハウアーは、「著作と文体」というエッセイの第4節でも次のように述べています。

「一つの思想の真の生命は、思想がまさに言葉になろうとする地点に達するまで持続するにすぎない。その地点で思想は石と化し、その後は生命を失う。だが化石した太古の動植物のようにその思想は荒廃を免れる。我々は思想のつかのまの生命を、まさに結晶せんとする瞬間の結晶体の生命に比することができる。

すなわち我々の思索が言葉を発見すると、その瞬間にただちに思索は真剣さを失い、真の厳肅さを欠く。我々の思索が他人のために存在しはじめる時、我々の中で得ていた生命を喪失する。この世に生命をうけんとして、幼児が母胎から離れるようなものである。詩人(注：ゲーテ)も次のように言っているではないか。

汝ら、矛盾によりて我を困惑せしむるなかれ。

人は言葉を口にするや、ただちに迷い始むるなり」(38-39頁)

そもそも思索を言葉にした時点で、それは思索とは別物になってしまふということです。例によって痛烈な見解です。しかし、皮肉なことにもこの見解は、ショーペンハウアー自身にも当てはまります。なぜなら彼のテキストをめぐって、今日私たちも大変に困惑させられ、迷わされたからです。

例えば彼はこう言っていました。本を読めば読むほど人は自分で考える力を失う、と。多読は有害である、と。そう言ったと思いきや、今度は、良書を読もう、その秘訣は悪書を読まないことだ、と言います。本を読むこと自体は否定していません。そして、良書とは古典中の古典のことであるという価値判断まで提示しています。これらの命

題はショーペンハウアーの中では一貫していたかもしれませんが。しかし、文字にされた時点で読者は迷い始めます。「良書」「悪書」といっても、それを区別する基準は、作者の側にあるのか、読者の側にあるのか。あるいは作者でも読者でもなく、作品そのものの中にあるのか。それとも、この判定基準も時代状況によって変化するものなのか、等々。これらの疑問はショーペンハウアーが「良書」「悪書」という言葉を使用したのがゆえに生じたものではないでしょうか？

ショーペンハウアーの本も「化石の花」か？

伊 藤:最後に、もう一つ問題を出させてください。一時間目に「遂行的矛盾」という話をしました。「言っていること」と「やっていること」との間に生じる食い違いのことです。例えば、ショーペンハウアーの「自分の頭を他人の思想の運動場にするのはよくない」という思想を読者がそのまま鵜呑みにすると、読者の頭がそのショーペンハウアーの思想の運動場になってしまう、ということです。こうしたタイプの矛盾は、さきほどの「思索」と「言葉」との関係についても言うことができると思います。

すなわち、ショーペンハウアーは、「一つの思想の真の生命は、思想がまさに言葉になろうとする地点に達するまで持続するにすぎない。その地点で思想は石と化し、その後は生命を失う」と述べていますが、彼の言う通りだとするならば、この『読書について』という本も、すでに化石の花にすぎないのではないのでしょうか。また、こうも述べています。「我々の思索が言葉を発見すると、その瞬間にただちに思索は真剣さを失い、真の厳肅さを欠く」。だとすれば、このショーペンハウアーの言葉もすでに真剣さを失い、真の厳肅さを欠いているのではないのでしょうか？

この問題を皆さんはどう考えますか？ 誰か意見のある方は？

学生 T：ショーペンハウアーの本も化石になった「太古の花」ではないかという問いに対して、私は、思想が化石になるのは悪いことではないと思っています。化石に生命が宿っていないとしても、後世の読者によって生命を甦らせることができると思っています。もちろん、ショーペンハウアーの完全な思想を甦らせることは無理ですが、彼の言っている思索をすること、その精神は読者によってなされています。著者が一番伝えたいことが甦っているのであれば、いいことであると思います。

伊 藤：例えば、化石になっている古代の植物は、そのまま甦らすことはできないけど、DNAを採取してクローンとして復活させることができるかもしれない。同じように、著者の伝えたいエッセンスが残るのであれば、化石になること自体は悪いことではない。そういう意見ですね。他にどなたか？ まだ発言していない人にも話してもらいましょう。

学生 U：ショーペンハウアー自身が、自分の考えた思想はみんなに伝わらないであろうと暗示していると思います。

伊 藤：彼自身が、自分の思想は読者に伝わらないのではないかという暗示をしている。なぜ彼はそのような暗示をしたのでしょうか？

学生 U：ショーペンハウアー自身がこの本を書いていて、矛盾点や、自分自身で納得がいけない点があったのではないかと思います。この文章を書いている時点で、ショーペンハウアーが自分の本が化石になっているということに気づいて、こう言っている……。

伊 藤：つまり、ショーペンハウアー自身、自分の主張を自分の著作に当てはめて考えていなかったわけではない。自分の思想も文章にしている

時点で化石になっていることを、読者に分かってほしいと思いながら、同時に、このことが読者には分からないのではないかと危惧してもある、と。

もしそうだったと仮定して、ショーペンハウアーには二通りの道があったと思います。一つは、率直に「今私が書いている文章もじつはもうすでに化石になっています」、と書いてしまう道。もう一つは、自分ではそう思いながらも、そのことはあえて書かずに読者の思索に委ねるという道です。ショーペンハウアー自身の意図がどちらにあったのかは分かりません。本音は彼に聞くしかありませんし、もはやそれは不可能ですから。

しかし、いずれにしても、彼がそこまで書いていないことによって、私たちが得ているものがあるかもしれせん。彼が手取り足取り全部説明していたらどうなっていたことでしょうか？「今私が書いている文章もじつはもうすでに化石になっています」と書いた直後に、また「この今私が書いている文章もじつはもうすでに化石になっています」と書かなければなりませんし、きりがなくなってしまう。それに、このようなことを彼が逐一書いていたら読者はますます考える機会を奪われ、考える力を失ってしまうことでしょう。それほど哲学者に手取り足取り導いてもらわないと私たちは考えることができないのでしょうか？書かないと伝わらないことがあるけれども、書くことでかえって伝わらないこともある。それゆえ、自分で遂行的矛盾に気づきながらも、それに気づくかどうかは読者に委ねて、「伝わる人に伝わればよい、伝わらない人には伝わらないで仕方ない」と思っていたのかもしれないね。そして、いまUさんがそのことに気づいた……。

他に意見はありますか？

「化石」という言葉が意味するもの

学生 V：自分自身が思索することが一番大事で、読書や、文字を書くことが目的になってはいけません。つまりショーペンハウアーは、他人に知らしめるために書くことを批判していると思います。自分自身で思索したことが結果として化石になることはよいが、化石を作ることを目的にするのはよくないと述べているのではないのでしょうか。

伊 藤：その通りかもしれません。ショーペンハウアーもはっきり言っていますね。金銭のために書く本は残らない。それは二流三流の本であり、悪書である、と。人間は本当に自分の中から生まれてきた思想を書くべきで、誰かに読んでもらおうとか、褒められようとか、お金を得ようとか、そうした低い次元ではなく、誰に見られなくても、褒められなくても、場合によっては読まれなくても、「私は私の表現をする」と決めて、そうした真実の自己表現を成し切った書物が良書である、と。

太古の花は、自分を美しい化石にしたいと思って咲いたのでしょ
うか。そうではないですよ。人間も同じです。表現したいように
表現する、その姿が残るのが一番いいはず。無理に誰かのためにな
ろうとか、誰かに受け入れられようとか、そうした他人本位ではな
く、自己本位で生きよ。ショーペンハウアーは、書くことを論じなが
ら、人間が自ら存在のままに生きるという生き方を説いているのかも
しれない。そのような読み方もできますね。

他にどうでしょうか？

学生 W：本を書く人にとっては、書く時点である程度考えをまとめている
ので、本は思索の化石だと言えるのかもしれませんが、読者にとっ
ては、本を読むことでそれに基づいて思索ができるのであり、そこから
生まれるものがあります。著者にとっては本は化石かもしれませんが、
読者にとっては花になるのではないかと思います。

伊 藤：そうだとすれば、ショーペンハウアー自身は本を化石であると言っているけれど、これは単純な化石ではないようですね。読む人によってはDNA から花を甦らせることができるような「化石」です。なぜそうした再生が可能になるのか。それは、ショーペンハウアーが残した化石がじつはそのつど微妙に違うからではないでしょうか。

さきほど紹介した二つのエッセイ（「思索」と「著作と文体」）をもう一度読んで、比べてみてください。「思索」第3節の、

「我々自身の精神の中にもえいでる思想はいわば花盛りの春の花であり、それに比べれば他人の本から読みとった思想は石にその痕をとどめる太古の花のようなものである」

という主張は、「著作と文体」第4節の、「一つの思想の真の生命は、思想がまさに言葉になろうとする地点に達するまで持続するにすぎない。その地点で思想は石と化し、その後は生命を失う」という主張と重なっています。ここまでは二つのエッセイはほぼ同じことを主張しています。

しかし、「著作と文体」には、次のような文章が続いています。

「だが化石した太古の動植物のようにその思想は荒廃を免れる。我々は思想のつかのまの生命を、まさに結晶せんとする瞬間の結晶体の生命に比することができる」

ここでショーペンハウアーが述べているのは、思想はむしろ化石になることで後世に残るということです。

つまり、二つのエッセイは非常に似た主張をしているのですが、「思索」のほうが、「思索は言葉にした時点で生命を失う」という点にウェイトを置いているのに対し、「著作と文体」のほうは、「思索は言葉にすることで後世に残る」という点にウェイトを置いているわけです。もちろん、本においては著者の思索のもっていた真剣さや厳粛さが失

われています。しかし本として残されなければ、その真剣さや厳肅さを後世の人が、万分の一なりとも学ぶという可能性すら失われてしまうでしょう。このように、ショーペンハウアーが残した化石も、作られた時々で微妙に異なるのであって、それゆえにこそ後世の私たちも、彼のゆらぎを通して、自分の思考をつむぎ、鍛えることができるのではないのでしょうか。

「永久の未完成、これ完成である」

伊 藤：これは大事な点で、ショーペンハウアー自身が、書きながらつねに悩んで考えて、自己修正を加えながら思想を作っていたことが分かります。裏返して言うと、ショーペンハウアーの思想自体も未完ということ。これはどんな偉大な哲学者、文学者、芸術家、宗教家にも言えることです。彼らは人生の最後の最後まで、自分の表現を模索し続けています。

このようなエピソードがあります。ある映画監督が「あなたの作品で一番優れたのは何ですか」と聞かれて、それは「次に撮る作品です」と答えたという話です。また、モーツァルトの有名な「レクイエム」は、未完成で終わりましたが、私は彼の作品の中で一番好きです。ベートーヴェンは交響曲を九つ完成させて、中でも「第九」が最高傑作とされていますが、じつは彼は第十番を用意していた。のちに草稿をもとに研究者がその第一楽章だけ復元を試みましたが、私はそれを聴いて感動しました。ベートーヴェンの『作曲ノート』を見ても、彼が「第九」を超える交響曲を書こうとしていた意気込みがうかがえます。

ショーペンハウアーもそうであったと思います。彼は73歳で亡くなりました。弟子の一人が書いた伝記によると、彼は健康に気を遣う人であったけれど、70歳以降しばしば心臓発作を起こすように

なって医者から絶対安静と言われた。弟子が心配して見舞いに行くと、ショーペンハウアーは「今死んだらみじめだ。まだ書かないといけない重要なことがあるから」と言ったという。数日後の朝、彼が起きて、家政婦が窓を開けて、その少し後に医者が来ると彼はソファの上で亡くなっていました。顔は穏やかで、死に際の苦みの跡はなかった。……ということなので、彼が死の瞬間、自分が死ぬと気づいたかどうか分かりませんが、「まだ書かないといけない重要なことがある」という思いを持ったまま死んでいった。しかも穏やかな顔をして。彼は見果てぬ夢を見ずに死んだ。しかし安らかな死をとげた。つねに次の作品こそ自分の最高傑作にしようと思って書いているから、結果としてすべての作品が最高傑作なのです。

宮沢賢治にこういう言葉があります。「永久の未完成、これ完成なり」。偉大な創造者はそういう心情の持ち主です。一つ一つの作品は毎回完成しています。しかし、彼の大きな目標から言えば、未完成です。もちろん、単なる未完成ではない。一つ一つが、その人がその時々にはかき出しなかつた傑作なのです。今日はパラドキシカルな話が多いですが、ショーペンハウアーの『読書について』も、多読の弊害をいさめながら、良書はたくさん読めと言ったり、あるときは言葉の限界を説きつつ、あるときは言葉の可能性を強調したりする。つまり、自分の最良の表現を求めてショーペンハウアー自身がつねに挑戦し続けたわけです。

おわりに

伊 藤：こうしてみると、多読は有害なのかどうかとか、良書と悪書とは区別できるのかどうかとかは、つまるところ意味のない問いかもしれません。というのも、ショーペンハウアー自身ももっと長生きしていたら、また違う本を書いていたかもしれないからです。すべて偉大な哲

学者の思想はオープンエンディングと言えます。最後の最後まで、最高到達点にはなく、偉大な未完成品です。しかし一つの完成品として、荒廃を免れています。

ということで、ショーペンハウアーの主張から何を受け取るかは、皆さんの自由です。今日の私の授業も未完成です。だから私が今日話したことは私の最終結論だと思わないように。またショーペンハウアーの書いていることもショーペンハウアーの最終結論だと思わないように。あくまでもすべての思想家はどこまでも終わりのない探究の途上で、探究のプロセスを書き残しているにすぎません。私たちはあくまでもそういう留保をつけながら、今度は自分が彼らのバトンを受け取って、彼らに代わって思索を続け、化石から太古の花のエッセンスを甦らせ、継承していくほかないのです。

〈後記〉

本授業から約1年後の2016年1月1日、ヒトラーの死後70年となり『わが闘争』の著作権が切れたことで同書は発禁解除となった。この件に関してはそれまで数年間にわたりドイツ国内で議論が戦わされてきたが、最終的にはミュンヘン現代史研究所が、「ヒトラーの扇動的な論説を論破し、中途半端さ、挑発的な発言、そして真っ赤な嘘を白日の下にさらす」ために約2000ページの学術的な注釈をつけたものを発刊した。この出版の是非については今なおドイツ国内でも意見が分かれているとのことである。

(参考：http://www.huffingtonpost.jp/2016/01/20/hitler-mein-kampf-germany_us_n_9024754.html [2017年2月10日アクセス])